

牛鬼退治

おし
よう
にん
たい
い
じ



劇団からっかぜ・親と子の劇場

ペルシャの歌

あなたは、こどもたちに、愛を与えることは

できるが

あなたの、ものの考えを与えることは

出来ない

なぜなら、子供たちは、子供たち自身の

ものの考えをもっているからだ

あなたは、子供たちの世話をすることは

できるが

彼らのたましいを、そっくり飼いなす

ことは出来ない

なぜなら、彼らのたましいは、明日という

住家に生きづいてゐるからだ

あなたは、子供たちのようになろうと

つとめてよいが

子供たちを、あなたのように、しようなどと

してはいけない

なぜなら、人生はうしろむきに進んで

ゆくものではないし

きのうのままで、とどまっているものでは

ないのだから

(この詩は、六〇〇年程前にペルシャの詩人がつくったものです。)

劇団員連名

伊石泉	今大岡	川河小窪	坂坂鈴	西野八林	土古深	船炎堀	前丸宮	宮村野	池石伊	内沢佐	鈴武竹	野藤平	水井金
熊川	川島	部崎	原山田	口口	木村	坂田	方田	沢水	井島	越山	田原	藤山	藤木
のひき	あ勝	口	原山田	口	村坂	田	方田	沢水	井島	越山	田原	藤山	藤木
りさく	三貞	や勝	民綱文	つみ	妙かり	千ナ	邦大	じちし	留と	一け	郷向	輝代	知す
子しよ	造宜	子治	剛史代	子論	子子	子秋	ミ慎	彦助	め子	美勝	子学	み郎	る
正子	美翠	子子	江よ	男子	江一	お行							



団員の写真

日本の演劇は、今はどのように未熟であっても、とにかくこの生きにくい社会の中で、歯を喰いしばってしかし楽しく熱心に勉強している若い人たちの間から生れて来るのではないかと思います。 山本 安英 (『鶴に寄せる日々』より)

本当の勇氣とは

何だろう

—演出のことば—

いしかわ ひさし

この劇のよさは何んといっても、「奇抜な発想とみなぎるエネルギー」にあるといえましよう。

この劇の物語は、今も四国の宇和島に伝わる「牛鬼祭」から素材を得て、作者と、演劇をやる人たちと、先生たちが力を合せて作ったものです。だからこの作品は、私たちの心をスツとひきつけてくれます。

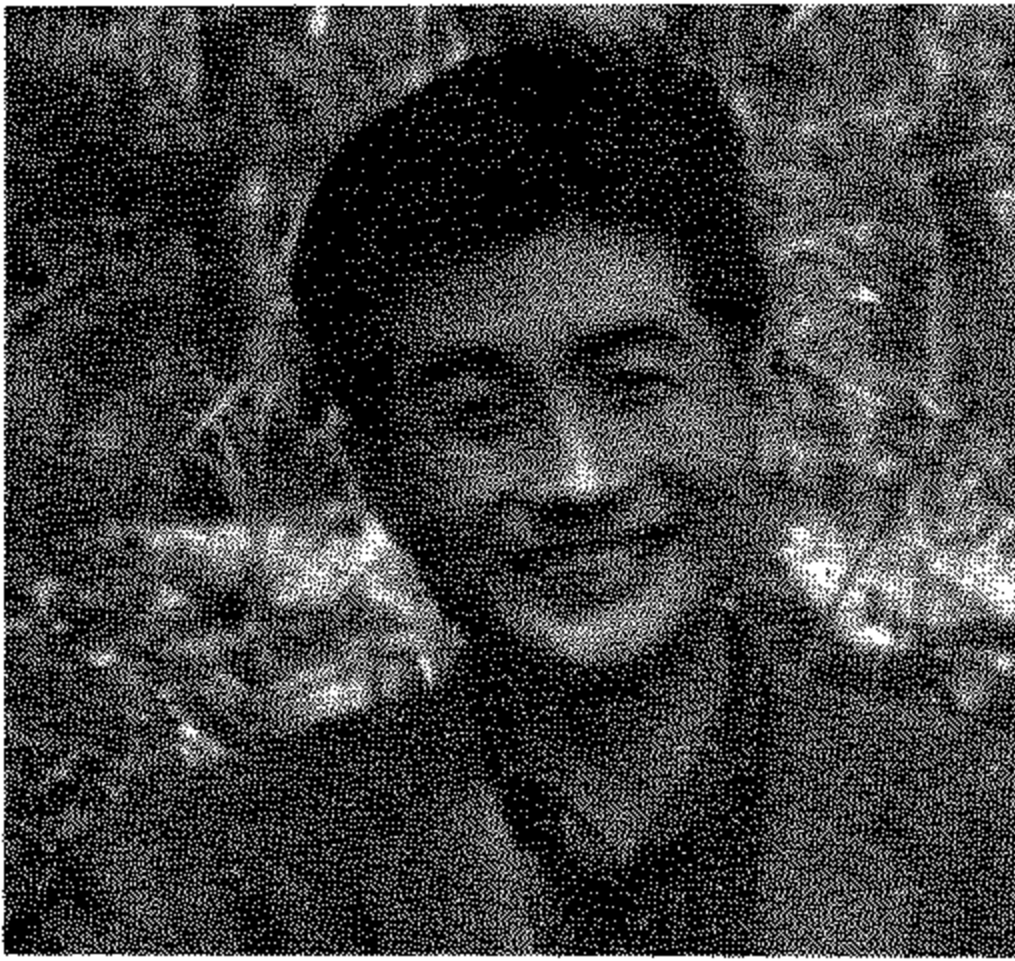
またこの劇は、私たち日本人の祖先の活躍をいきいきと描いている点でも特徴的です。この劇の物語は、働き好きで勇敢で、美しい心の持主の伊和祢が、村人と共に力を合せて「牛鬼退治」をやったのけ、村の危機を切り抜け、長者のものだった村を村中皆んなのものにして行くというものです。が、一見単純そうに見える物語の中味は、私たちに大切なことを教えています。

それは、一人一人の力は弱くても、お互いが知恵と力を出し合い、勇氣をふるえば必ず道は開けてくるということを教えているのです。でも、これはそんなに簡単にい

えないことです。何故なら、本当にそうあるためには、一人一人自分を変えて行かなければならないことだからです。

特に今日のように、山積みの宿題、つめこみの補習、テストの洪水の中にあっては、お互いが知恵を出し合うなんてことは大変なことなのです。とかく、おとなしい規格にはまった、無気力な子どもになりがちです。しかし、子供たちは本来生き生きとして元気が良いもの、じっとしてはいられないでいつも動き廻り、そして、自然や人間や世の中のことをどんどん知って行く、そのようないつも伸びて行くすばらしい可能性を持っているのです。

この劇に登場する子どもたちの勇氣に満ちた行動は、どしんとみんなの胸にひびくものと思います。そこから、それぞれ自分にとって「勇氣」を持つとはどういうことなのか、どういうことをすることなのか、を見出して貰えたらと思います。



—五 場—

村の娘、ハナは美しくてやさしい少女です。のろ。ま。だ。が、村



スタ
ツ
フ

— 2 —



一番働らき者のイワネは、石細工が得意です。今日も、美しいかんざしをほってハナにおくります。

ところが、長者どんは、ハナが嫁にほしくてなりません。牛鬼様からのさずかりものという金のかんざしをやるから、イワネのかんざしなんか捨ててしまえ、というのですが、ハナはイワネの心のこもったかんざしを捨てる気にはなりません。

おこった長者は、手に持っていたムチをハナの刺しゅうの道具に、当ててしまいます。

ムチに当たった者は、牛鬼様のいけにえにならねばならない、というおきてがあるのです。みんなは牛鬼様のたたりをおそれています。

ひとに迷惑をかけるよりは、とハナはひとりで牛鬼様の岩山へ向いました。

第三場

その晩、村人達は、ハナを助けてくれるように、牛鬼におうかがいをたてますが、「荷車一ぱいの米を持ってこい」との無理なおつげでした。

そこへ、イワネが前よりいっそう美しいかんざしをほって、ハナにみせにきました。みんなから、ハナが牛鬼様の岩山へへばったと聞くと、あののろまなイワネは、人が変わったように、「みんな、薄情もんじゃ」と泣きさけんで、ひとりハナを助けに、岩山めがけてかけ出しました。

真暗な山の中。ハナをさがして、つかれはてたイワネは、歌をうたいだします。ハナがいつもうたっていた歌です。と岩の奥から同じ歌声がかすかに聞えてきました。ハナの声です。イワネは、声の聞えてくる岩のあたりを、力いっぱい押してみましました。岩はぐらぐらと動きます。こうして順々に岩を押してゆき、最後の岩を押した時、岩は大きくかたむいて、イワネの手をはさんでしまいます。

しかし、イワネを追った来た村人たちが、いっしょに岩を押し開き、岩屋の中からハナを助け出すことが出来ました。

村中、大騒ぎです。牛鬼様が岩山からおりてきて、長者どんの屋敷にあばれこんだのです。そして長者どんの倉にかくしてあった米俵を、全部放り出してしまいました。それを見た村人達は、今迄牛鬼様におそなえた米は、全部長者どんが横取りしていたのだと、はじめてわかりました。

牛鬼様は、村の方へも来そうです。

イワネは、「牛鬼様を取りおさえよう」といいます。そして村のケヤキの木に宙さまを落とし、大きなさけめをつくり、片いっぽうをひらいてつなでしっかりくりつけました。やがて、たいまつにおびきよせられた牛鬼様が、ケヤキの木をとびこそうとした時、つなは、はずされ、勢いよくはね返って、牛鬼様の首をはさんでしまいます。

みんなが、こわごわ近よってみると……

キャスト

伊和 柁宮 園子
葉奈 坂口 せつ子
於次 河原 民史
津里 坂口 論子
亜矢 堀熊 え子
日ま 渡辺 洋二
にま 林 弘ミ
ば者 遠矢 忠
長鬼 (1) 藤原 博
牛鬼 (2) 赤松 大
語人 深沢 大助
村 山田 翠子
平間 子
内山 子
竹島 子
藤井 子
沢谷 子
水島 子
宮口 子
坂口 子
山本 子
伊藤 子
古藤 子
石原 子

協力

劇団・友の会準備会
劇団・O B の会準備会
劇団・だるま
森舞踊研究所
静大室内管弦楽団
後援
浜松市教育委員会
浜松市教育研究会視聴覚部
浜松市教職員組合
浜松演劇教育同好会
西部教育サークル協議会
高教組 西部地区
静岡岡県 演連
浜松演劇観賞協議会

お子様の夢と科学を育てる

よい子の
ヤマタカ



浜松市鍛冶町 120 番 TEL (52) 1301

「牛鬼」とは

なんででしょう？

「牛鬼」は、古くは「枕草子」や「大平記」などにも記され、愛媛県をはじめとして各地にその話が伝えられています。又、宇和島市（愛媛県）の北方、光満に次のような伝説が今でも残っています。

それは、昔「入らが谷」（人間の入れぬ谷の意）で、今でもその名があります。の奥に住む「牛鬼」は、毎夜里へ来て田畑を荒すので、庄屋が村の為に生命を賭して「牛鬼」と闘い、その末やっとのことで打ち殺し「牛鬼」の血が石を赤く染めたという話です。「牛鬼」とは、山深く、あるいは谷深く住む野生の牛のことだったのでしょう。

宇和島では「牛鬼」のことを「オショウニン」と呼び、次のような作りものが残っています。その胴体は五、六メートル、幅三メートルもあり、青竹を割って牛の胴体のように編み、棕櫚の毛が、赤色の布で覆います。首の上の頭は鬼に似せて赤く塗り、左右の角は太く長く、四メートル余りの丸太を軸にして上下に動かします。尻尾は剣にかたどって石の御幣をつけるのです。思えば鬼の顔に長い首、大きな胴体にいかめしい尻尾というグロテスクな「牛鬼」なのです。

この「牛鬼」は、お祭の神輿の先頭となり、四、五十人の青年達が、その胴体に入っかつぎ、数十人の子供達が竹筒で作った貝を吹いてねり歩くのです。その竹貝の音から「牛鬼」のことを「ブーヤレ」とも云います。

牛鬼退治の劇も、実際に「牛鬼」が登場して、大暴れにあげられます。

登場人物紹介

ばあさま—この物語の主人公伊和ねのおばあさん
働き者の孫息子が一番の自慢です。

じい—「やめろ」おたたりがあるぞ」と村人達をいましていた爺も最後には、気がつきます。

於兎次—口は悪いが元氣な若者。得意の太鼓で雷様をよびよせます。

津那里—「勇気出すのが本当の知恵だ」津那里もやっと決心します。

亜矢—「おら、木のぼりや走りっこなら誰にもまげやせんぞ」—牛鬼退治で大活躍します。

日—出—こわいこわいと思っていた牛鬼様だが、皆と一緒にならおらにだってやつつけられる。

伊和称—のろまだといわれていた伊和称は、皆と知恵を合わせながら、牛鬼様からくりを、少しずつ解いていきます。

葉奈—美しくて心のやさしい葉奈は、村のみんなから愛されています。ある日、長者のムチが当たって牛鬼様のいけにえにされてしまいました。

長者—「もうもう、われは牛鬼大明神であるぞ。」インチキのおついで倉の中は米俵で一杯です。

牛鬼様—体は牛で顔が鬼、尻尾の剣が空に向いとる。口は西瓜を割ったよう、するどいきばがニョツキリ。だが本当は…。

これだけは守ろう

—演劇をみるエチケット—

みんなが楽しく、ゆかいにおわりまですごせるように、ひとりひとりが気をつけましょう。そのためには、次のことを守りましょう。

○席についたら、しずかに幕のあくの待ちましょう。
○劇が始まったら、ぜったいにおしゃべりはやめましょう。

○劇をみていて、いいなあ、すてきななあ、と思ったら、おもいきり手をたたきましょう。

○劇の途中で舞台の電気がきえて、暗くなるところがありますが、劇がおわったのではなく、劇がつづいているのですから、静かに待ちましょう。

○会場では、お菓子など、たべ物をたべてはいけません。ここは、教室と同じです。

○お便所は休けい時間に行きましょう。
○帰りにはかならずいすを上げて、自分の席のまわりを紙くずがちらかっているかよくたしかめましょう。

○劇をみたあとで、次のことをやって行きましょう。
○感動のさめないうちに話し合しましょう。「みてしまったらおしまい」という考えはまちがいです。

○日記や作文にかいたり、図画にえがいたりしましょう。

○家に帰って今日みた劇のことを家の人にしてあげましょう。

○劇団や出演者に、感想文を書いて出しましょう。きつとお礼の手紙をくれます。

すべての子どもたちに

牛鬼退治を

すずきふじお

(牛鬼退治を観る会・事務局長)



おとうさん、おかあさんたちは、だまされたり、さげすまれたりしながらも、なんとかして、しあわせになりたいと願い、せいっぱい生きているのです。でも、人間的にしあわせに生きたいという願いも、たえずうらぎられたり、ふみにじられたりするのです。だからこそ、せめて、子どもたちにだけは、自分たちのようなみじめさやせつないおもいをさせないで、胸を張って堂々と生きていってほしいと願わずにはいられないのです。

だから、悲しみや苦しさにたえながら、子どもたちへの期待を大きく胸ふくらませているのです。

しかし、子どもたちの多くは、子どもらしい生活を破かいされ、生きる目あてを失なうて、まるで人形のような人間になってしまっているということです。

生活と生産からきり離され、生きる日あてを学びとることのできない子どもたちは、統制の枠へはまりこんで人間としての基本的な感覚を失って、無気力無関心になるか、その土台の上に目あてのない「根性」を強調されて体制化に一役買わされるか、そのどちらでもない枠にはまらない子は、白らのもったエネルギーを非行として発散するか、どの道を選ぶにしても、今日の教育文化の

枠のなかでは、子どもたちは、人間として、かしく、たくましく育つことを阻まれているという危機的状況が高まっているのです。

そうした希望と未来をうばうようなきびしい状況のなかでも、私たちは、子どもたちを生き生きと、積極的に、つねに自分自身であるように成長させる環境をみんなにして、みんなの力で、子どもたちのために作りだしていく、ほんとうに子どもたちのためになる教育文化を与えていこうとがんばってきているのです。

生きるということは、人間的に幸福になろうと努めることだよと、はげまし、子どもの問題を理解し、子どもの生きる態度をみつめて、人間的に幸福に生きようという願いと、チエと力とを、子どもたちの中に育てる努力を重ねてきているのです。

今回、上演される劇団からつかぜの「牛鬼退治」は、からつかぜの人たちのはげしい情熱と作品の良さが、美しく結晶されて、子どもたちの中に生き生きとしたチエと勇気と力をかきたてる充分な劇にまとめられています。ここには、ひとのことなど考えようもしない長者の、自分だけの欲を追求していく生き方の典型と、やさしさに満ち満ちて、みんなのために行動していく生き方の典型が、実に生き生きとすばらしく、たくましいこのひびきにのって語られています。そして、祖先の人々の素朴な願いやいのちが脈々と波うって、せまってくるのです。伊和称を先頭とする村人たちのチエと勇気の行動は、民衆の願望をおしつぶす策略の象徴である牛鬼をうち破って、花が咲き、田畑もみのる村を生み出して行きます。このすじ道を子どもたちは、はだで感じとって、絶大な拍手をおくるにちがいありません。

すべての子どもたちに「牛鬼退治」を

キッチン女子亭Coty

出前迅速 浜松市千才町公会堂西——tel (53) 2039

(52) 9372

浜松駅前ビル地下味の一番街——tel (54) 6051

各種宴会、工場、会社落成披露パーティーの出張サービスの御用命も承ります。

お母さんに

べんきょう

(小学二年 女子)

わたしは、さんすうのべんきょうがきらいです。でも、学校のべんきょうは好きです。テストは、こくごがすきです。

おかあさんは、ひどいです。

わたしが、「まい日のべんきょう」の

さんすうをやっていて、

いまひきぎんをいっしょうけんめい

かんがえているのに、

かんがえていないと、いいいます。

だから、あたまにきてないて、しまいます

そうすると、おかあさんが

「なくとやめかしてやると、思ってる、

いじにやらせるに。」

とおこって、いいいます。

わたしは、いやになります。

でも、しょうがないので、やります。

いかがでしょうか。

子ども(二年生)が、おとなのおかあさんといくら言い合いしてもとても勝ちめはありません。いくら正しい意見があっても、なかなかわかってくれません。最後には、おとなの理くつなり、おどかしでもって、正しい意見もひっこめなければならなくなってしまふのです。

それで、くやしくなつて泣いてしまふことになるのです。この泣くことが、最後の抵抗なのです。しかし、また子どもの心がつかめないおかあさんは、「なくと、やめかしてやると思ってる、いじにやらせるに。」

と、追いうちをかけてしまふのです。もう、小さい二年生の子では、抵抗する方法はありません。そこで、「わたしは、いやになります。でも、しょうがないので、やります」と、いうことになってしまふのです。

おかあさんが、勉強する子にさせようとして、いっしょうけんめいになればなるほど、子どもを勉強ぎらいに追いやっていく結果になつてしまつていくのです。

(浜松の作文教育の実践の中から)

浜松演観協 九日

九月 例会 二十一日

二十二日

前進座

五重塔

作・幸田 露伴

脚色・津上 忠

キャスト

中村 翫右衛門

嵐 芳三郎

瀬川 菊之丞

藤川 八蔵

市川 岩五郎

中村 梅之助

演観協に入りましょう。

入会金 一〇〇円

会費 月三〇〇円

申込みは

浜松市田町三十四

電話(五三)九六五三

こんめえ馬

柳沢 竜郎 作詞
川村 江一 作曲

でっかい声で二拍子ふうに



1. こんめえ うまだちゅうて ばかにすんで ねえ や
2. こんめえ うまだちゅうて ふれてゆくで ねえ や
3. こんめえ うまだちゅうて ばかにすんで ねえ や



いまんみろ でかくなつて のつばらをかけるだ ど
やろんとこの じんじうまめ やせこでなきくさ る
めんこい ど でかくなつて むらじめをまわるだ ど



おらをのっけて はやてのようだ おらをのっけて な
やろにふたれて ひとあわふいて やろにふたれて な
おらをのっけて ゆっくりいくだ おらをのっけて な

牛鬼のうた

一、それうてやれうて、牛鬼の剣^{つるぎ}

岩にひびかせ 山にひびかせ

作りかえせよ 牛鬼の剣^{つるぎ}じや

一、こんめえ馬だちゅうて

ばかにすんでねえや
いまんみろ でかくなつて
野っ原を かけるだど
おらをのっけて

二、こんめえ馬だちゅうて

ふれてゆくでねえや
やろんとこの・じんじ馬め
やせ声で なきくさる
やろにぶたれて

三、こんめえ馬だちゅうて

ばかにすんでねえや
めんこいど でかくなつて
村中を まわるだど
おらをのっけて
ゆっくりいくだ
おらをのっけてな

合評会のお知らせ

7月3日児童会館1号室

いろんな意見を寄せて下さい

遠州生協指定店

宝 石
貴 金 属

国 宝

浜 松 市 松 江 町 6 2 (馬草通り)

T E L (54) 5 6 5 0 (52) 2 5 8 7

これまでとこれから

——創立十五周年を迎えて

深 沢 大 助

〈演劇を続けることの困難について〉

いつ頃だったか、静芸の山崎欣太さんが「地方の劇団」と、芝居好きがベレー帽でもかぶり集って、演劇雑誌等で読みかじった東京の新劇の真似でもしているのだらう、と思われやすい」といわれていたことがあります。山崎さんも、その中でいろいろ訴えられていましたが、当事者であってみれば、そんな安易な気持でなど、とてもやれよう筈がないのです。

今日では、演劇をやること自身すでに斗いを意味しています。激しい労働と生活苦、多くの享乐的な誘惑の中にあつては、せいぜいテレビ横目にゴロツと寝てしまうのがオチなのです。それに演劇は、ただ一人書斎やアトリエにこもってやれるものではなく、集団で創るといふ営みからくる、もつと人間臭い困難さや複雑さがあるといふ加わって来る訳ですから、ただ密かに演劇だけをやっているという訳には行きません。その上財政難、会場難と来れば、どうしても困難な原因を社会的に歴史的に深めて見きわめ、それを変えて行く姿勢に立たなければ一歩として進まなくなります。

〈私たちの十五年が教えるもの〉



カンカラ広場にあつまれ

思えばこの十五年間、浜松にもいくつかの劇団、演劇サークルが生まれては消えて行きました。ともかく、めまぐるしく消長した歴史であるといえましょう。このことはそのまま、「芝居好きがベレー帽でもかぶり集って、真似ごとをやる」ということでは、決してやれないことを物語っています。

こうした中であつて、「劇団からつかぜ」は、その制約や困難をいつも抱えながら、とにかくも十五年という歴史を創り出して来ました。これは大きな誇りです。しかし、前記したことを考えれば、決して容易に十五年があつた訳ではありません。そこには、この劇団を守り育てて来た多くの人たちの、それこそ筆舌ではいづくせぬ苦勞がこめられています。

その十五年は、考えようによっては取立てていうほどのものではないかも知れません。しかし、細く弱くとも、他の文化運動と結び重って、浜松の文化運動の太い流れを形成して来ているのです。市芸術祭を起し、常にその中心的役割を果し、芸術祭の歴史を書き綴って来たこと。浜松労演——演観協、また労音の結成を推進して来たこと。あるいはまた、「子どもの時、からつかぜの児童劇をみた」と瞳を輝かして語る青年をみかけるたびに、私たちはつくづくこの劇団のやって来た仕事を思い起し、そこから励まされもします。若々しく息づいている今の劇団のうしろには、このような十五年の歴史が脈々として繋がっているのです。

しかし、多くの地方劇団の歴史が語るように、劇団の歴史が



ベトナムの炎は消えない

雛人形と花環の店

有楽街(有)



瀬堂

TEL. (52) 2684

池町場 (53) 5050

長いということが、そのままその劇団が秀れているという保障にはなりません。現に十五年の歴史を数えていながら、通してやって来た人が一人もいないのです。数えてみたら、何と二百名以上もの人が入替っているのです。だから、有形無形に十五年が受継がれているとはいうものの、芸術祭で示した、あの泥くさが看板のいくつかの作品より、現在のものが秀れているとは、いえません。技術の蓄積が可能となっていないのです。これでは、竹に木を継いだような歴史と思われるでも仕方ありません。

〈東リ演のこと〉

現在私たちは、「東日本リアルイズム演劇会議」加盟しております。これは、私たちと同じような劇団ばかりが集って、お互いの経験を出し合い学び合い、そのことによって、働らく仲間、要求に応え得る演劇運動を一步でも前進させよう、ということとで生まれた組織です。加盟して驚いたことは、その歴史も、突き当たっている困難も、全国どの劇団も似ていることでした。私たちは、そこで観客に学ぶことがどれだけ大事なことを学びました。劇団の前進の基礎は、そこにどう対しているかで決まるということ、従って、私たちが県とか市とかにオンブしての公演をそれまで中心にしていたことが反省させられました。観客を考えないでも済んでいたのです。組織的に批評会や反省会や交流会を持ってこそ、みんなの力は十分に活かせるのです。また、民主的な運営のあり方や、研究生システム、あるいは具体的な作品の創り方についても、私たちはそこから多くを学びました。働くものの中から、働くものの中へ、この姿勢を私たちはその実践を通じて理解して行きました。そういう姿勢から創り出した、「カンカラ広場にあつまれ」「陸橋」は未熟さを越えて、多くの仲間共感を得ました。また研究生も二期まで送り出し、現在第四期生が活発に活動を行っています。一年間にそのピークの年で七千名もの人に観て貰えるようになったことも強味です。

〈これからの私たち〉

今回の浜松公演のあと、〈牛鬼退治〉を持って、私たちは遠州地方約十ヶ所に移動公演を行う予定です。この公演を通じて、遠州地方の全域の人たちの要求に応え得る劇団に育って行きたいと思っています。つまり、私たちのこれからは、名実共に遠州地方の働く観客の要求に責任を負う劇団となることです。そのためには、どうしても創作劇を生まねばならないと思っています。何故なら、遠州地方に私たちが深く根ざし、働く人々の生活と希みと斗いに堅く結びつくなら、そして働く人々の中から作品を取材し、返すという仕事の基本であるなら、それらが結

実されたものとしての創作劇を生まねばならないのです。

地域の要求に全的に応えるためには、創作劇を生むと同時に、舞台の質をよくしなければなりません。働きのながらだから低い質のものでいいという考え方は、私たちは撲滅すべき考え方だと思っています。職業劇団であれ、非職業劇団であれ、観客の要求に応える演劇を創るということでは差がない筈です。

また、研究生システムを強化し、五〇名以上の団員を生み、量的にも前記のことを保障せねばなりません。

以上述べた如く、基本的には、つくる(創造)、ひろげる(普及)、まなぶ(学習)、みちびく(期生)の四点を強力に押し進めることですが、今年には新たに「稽古場建設」「劇団員一部専従化」が加わりました。秀れた文化を生み出すトリダー——稽古場と、人的保障である専従化を、是非とも可能にしたいと思っています。

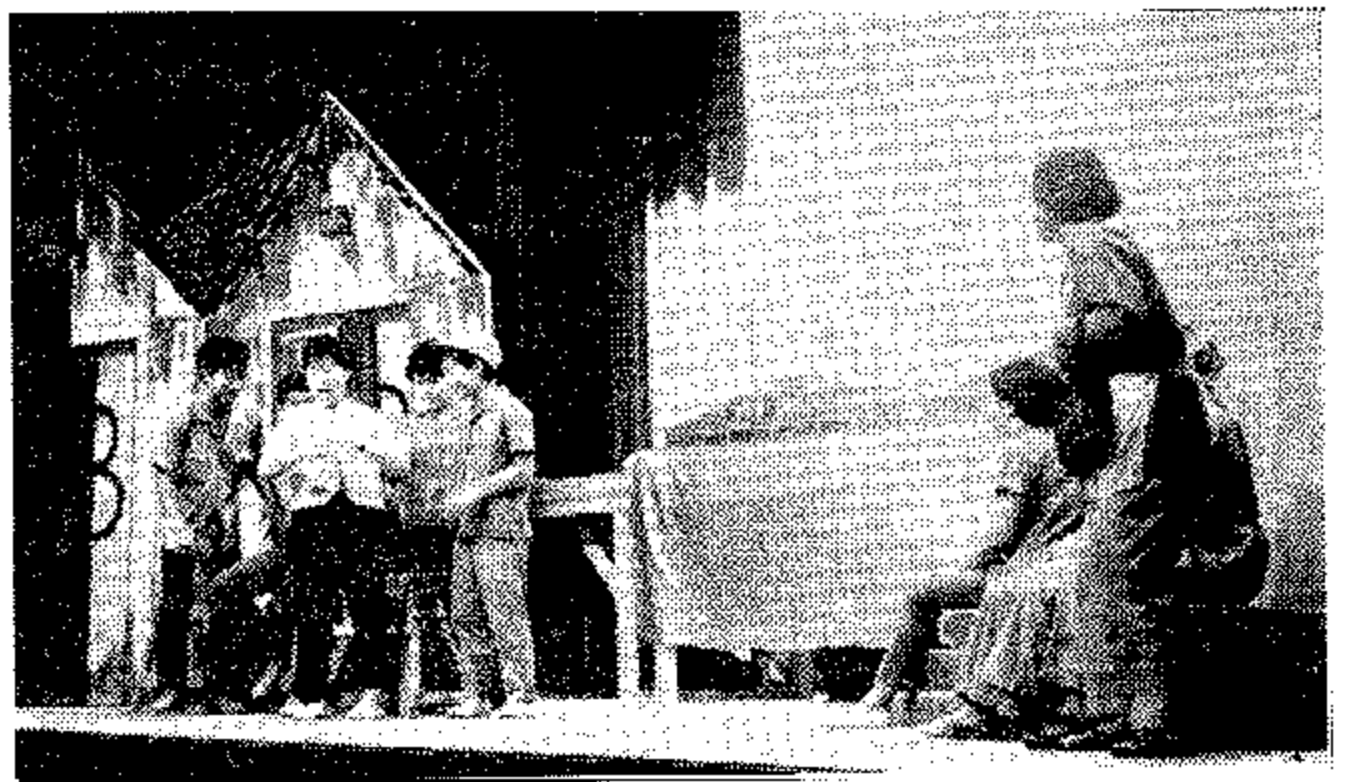
〈発展は遅々としているが〉

大分景気のいい話も出て来ましたが、現実には思っていることのどれだけでもやれていません。まったく発展は遅々としています。

しかし、みなさんの批判と援助さえあれば、そして私たちがそれに応える立場に立つなら無理なこととは思いません。

——演劇というものを唯の娯楽、見ても見ないでもいい慰みものにさせておいてはいけない、我々は演劇を人間が生きて行く為に必要不可欠なものにしなければいけない。

(これは日本の新劇の創始者である小山内薫先生の言葉です。)



陸 橋

ベビー・子供服の

コメキン

浜松市かじ町(52) 2241

おそばは
駅前 の

東京屋

TEL 0201

スポット (1)



——ナナちゃんのこと——

私たちの仲間、林ナミ——通称ナナちゃんを紹介しましょう。最近彼女は「新婚早々ばあさま役とはクサッちゃうわ」と不満気だそうです。それもそのはず、二期生当時から今日まで「陸橋」の「なみ」「黒い太陽」の「ひで」と、一回も若い役に出合ったことがないのです。それに今度の場合は、結婚四ヶ月めにして、なのですからボヤクのも無理ありません。

しかし、ボヤきながらも、団員である夫君、川崎勝治——ブッチャんと甘いムードを活かして、ちゃっかり屋のかわいいばあさまを結構やっています。

さて、結婚も終えて、演劇を続けることがいよいよ大変になり、ええいッ、こんなもの、と思うことも出て来ることでしょう。しかし、ブッチャんと、またみんなと話し合いながら、その試練を切り抜けて行って下さい。

これからのナナちゃんにとっては、それをいかに演じるかより、なぜ演じるかがいつも問題となることでしょう。その試練の中で、増々ばあさまが本物になり、人生の深い年輪が刻まれて行くことでしょう。(大助)

あなたも加わりませんか

——第四期研究生への招待

第四期研究生は、去年の十月より活動を始めました。働きながらも演劇をやりたいという情熱家、自分の弱い性格を直したいという努力家、また、友だちが欲しいといってあつまった仲間、……職場も年令もちがう仲間があつまり、演劇や、社会や、お互いをみつめ深めながら、熱い心と心を演劇を創ることに燃やしています。九月に卒業公演をみんなで行う決まりました。「ピカの陰から」という作品ですが、現在スケジュールを立て合っているところです。しかし、仲間はまだまだ不足です。どうぞあなたも、この研究生に加わって下さい。

——募集要項——

資料 演劇を愛する人なら、年令、男女の別なく誰でも結構です。

稽古日 毎週水・土曜日の夜六時三十分より

稽古場 玄忠寺幼稚園

(浜松市田町・長崎屋前にあります。)

申し込むところ 劇団事務所(浜松市板屋町三一五番地)か、水・土曜日の稽古日に稽古場の方に来て下さい。

発行日 一九六八年六月二十九日

発行所 劇団 からっかぜ

浜松市板屋町三一五

発行人 石川 ひさし

印刷所 株式会社 開明堂

劇団からっかぜ・第4期研究生卒業公演

ピカの陰から

9月29日(日)

浜松児童会館ホール

— 2 場 —

戦後23年、太平ムードがうたわれるその底で、今も原爆の傷痕は生きつづけている。この劇を、平和を願うすべての人々におくる。